

社会的意味づけを重視した社会科実践研究 ～5年「私たちの生活と情報～ケーブルテレビから地域の情報化を考える～」を例に～

岡山県教育委員会津山教育事務所教職員課

高岡 昌司

1 はじめに

PISA調査において、日本の子どもは根拠をもって自分の言葉で考えを述べる問題などの無解答率が非常に高かった。このことについて、私は、授業の中で、問いに対する一定の答えだけを重視する教師の意識や学習活動のあり方に大きな問題があると捉えている。つまり、漠然と一般解を発表させるだけでなく、自分なりの考えの根拠を問う視点や、目的的に調べ活動を設定することが必要であると考えます。

PISA型読解力で言われる「連続型テキスト(物語、解説、等)と非連続型テキスト(図、地図、表等)の中から情報を取り出すだけでなく、そこから自分なりに解釈したことを熟考・評価する」という活動を授業の中に明確に位置づけるということである。

そのために、本実践では、

- ① 価値判断場面を設定する。
自分の考えの根拠を問う。
- ② 目的的な調べ活動を設定する。

以上、2点を設定する。事象に対して自分の言葉で社会的意味づけを行う実践を提案したい。

2 単元について

(1) ケーブルテレビとは

本単元では、開局したテレネットやしろ(ケーブルテレビ)を取り上げる。近年、パソコンとインターネット、携帯電話などの普及はめざましいものがある。それに対応する高度情報化社会の視点の一つとして、地方自治体を中核とした情報通信基盤の整備、市民生活・行政の情報化等の「地域の情報化」が注目されている。一方で、情報格差の拡大や、地域コミュニティの弱体化、地元商店街の縮小、急激な少子高齢化等、私たちの日常生活を取り巻く環境に大きな変化が起きている。

これらの課題を解決する一つの施策として、通信と放送が融合したトータルデジタルネットワークとしてケーブルテレビが注目を浴びている。

ケーブルテレビは、もともとは難視聴対策用の共同施設がはじまりであったが、今や多チャンネル化、多彩な映像や情報を双方向でやりとりするなどその可能性は大いに広がっている。特に、その地域独自の自主放送番組の中には地域に密着した情報を中心としたコミュニティチャンネルとよばれるものがある。例えば、農村地帯では農産物の市場の状況や農業に関連するきめ細かい気象状況などの情報を提供するなどその地域にとってなくてはならない存在になっている。自主放送を行う比較的大規模なケーブルテレビに限っても加入世帯数¹⁾は約1800万(普及率36%、平成16年度末)を越え、身近な映像メディアとして地域社会に定着してきている。

(2) 教材化のねらい

5年学習指導要領では第3次産業の目標として「我が国の通信などの産業について、見学したり資料を活用したりして調べ、これらの産業は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする」ことがあげられている。情報の有用性や役割、情報化のもたらす様々な影響を考えるとともに、情報活用、発信や伝達能力や態度を身につけることが大切である。

そこで、地域密着・住民参加型の放送局であるケーブルテレビの良さをいかし、番組企画を行うことにした。これは、一般的に実践されているテレビ番組づくりのように番組製作の仕組みや人々の工夫や苦勞を体験しながら理解するといった活動とは違う。ケーブルテレビの番組企画を吟味する中で、地域にとって、どんな情報がどのように活用され、人々のくらしにどのような影響を与

えるのかについて考えることが中心となる。

つまり、番組企画を通して、「地域の情報化」の意味づけを行うことをねらいとして設定した。

新しい情報通信として期待されるケーブルテレビの番組企画は、子どもたちが情報と生活とのつながりの多様な価値に気づき、情報の受け手としての立場だけでなく情報の発信者としてより確かな認識を深めていくと考えた。子どもたちにとっては、まさにタイムリーでリアリティある情報単元の教材になると考えた。

提案① 価値判断場面の設定

地域の情報化とはどうあるべきかについて、価値判断場面を設定する。「地域のどこに目を向け、何をとりあげるのか」（話題性）「地域にとって必要な情報とは何か」（必要性）「ケーブルテレビだからこぞできることは何か」（独自性）など番組企画の価値判断を行うことを通して考える。

提案② 目的的な学習活動の設定

より説得力のある根拠にもとづいて主張をする為、家族や地域の人への聞き取りや、電話・FAX・メールを活用して、全国各地の事例（番組）などの調べ活動を取り入れる。

地域密着型のケーブルテレビは、実際に、目で見て確かめたり、自ら情報を発信したりできることから、これまでの教科書で扱われてきた一般の放送局教材に比べ、より身近でより具体的な事例を考えることになる。

3 授業の実際的展開

(1) 対象 第5学年

(2) 単元 『私たちの生活と情報』²⁾

～ケーブルテレビから地域の情報化を考える～

(3) 単元目標

- 地元のケーブルテレビ局をもとに、情報通信産業は、国民のニーズを考え、様々な情報を工夫、努力して提供していることや、自分たちの生活とのかかわりについて、意欲的に調べることができる。(態度)
- 番組について調べてきた認識をもとに、自分たちとのかかわりを考え様々な立場から価値判断を行い、意志決定ができる。(能力)
- 情報通信のしくみや携わっている人の工

夫や苦勞，生活に大きな影響を及ぼしていること，私たちの生活にとって情報の有効活用が大切であることを理解できる。(認識)

(4) 学習の流れ (全16時間)

【オリエンテーション「情報とは？」(1時間)】

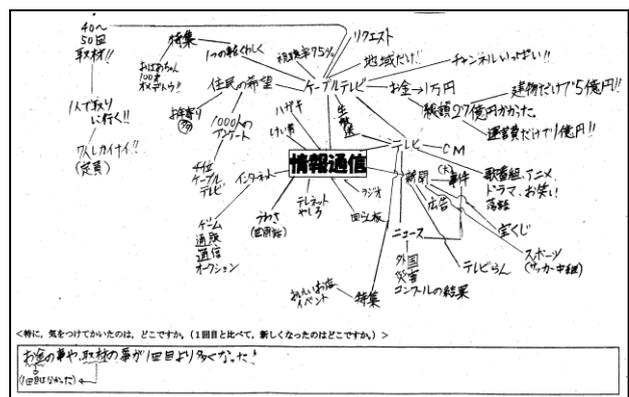
情報とのつながりを概観するため、自分が得ている情報の種類や情報手段，その特徴について話し合った。A児のイメージマップ(わかったことや思ったことを図示化したマップ)には，生活経験から新聞，テレビ，ラジオ，携帯電話，メールなどそれぞれの良さや役割をまとめていた。

【第一次「ケーブルテレビって何だろう」(5時間)】

地元ケーブルテレビについて子どもたちの興味関心(「ケーブルテレビとは何か」，「働く人について」，「番組づくりについて」)を大まかに分けた。毎日みるテレビには関心が高く，疑問から番組ができる仕組みや情報産業に携わる人々の工夫や苦勞を捉えさせようと考えた。

いきなり番組企画をさせるのではなく，一般的な番組作りから子どもの意識をつなぎ，テレビ局の情報通信における役割を考えたのである。そして，調べ活動として，ケーブルテレビ局の見学を行った。見学の視点としては，教科書等の一般の放送局と比較しながら，テレビ局としての共通点や相違点を見つけることにした。

(A児のイメージマップから)



- ・ ケーブルテレビは、住民の希望からつくられた。予算，番組製作の仕組み，少人数で取材を行う努力や工夫，限られた地域にのみ放送する放送局である
- ・ 普通のテレビ番組と違い，地域限定のコミュニティ番組がある。

【第二次「新しい地域の番組を考えよう」(7時間)】

第一次において、子どもたちはケーブルテレビが地域密着型放送局であることを理解したものの「あまり見てない」という意見も出てきた。そこで、役場が行ったケーブルテレビに対する住民アンケートの結果を提示した。

その結果、46%の人が現状に対して「不満・やや不満・どちらとも言えない」であった。そこで、テレビ局の方がどんどん番組内容の提案をしてくださいと話していたことにふれ、ケーブルテレビの魅力伝える番組企画を提案しようと投げかけた。最初、子どもたちは、意気込んで番組を考えたが、予想通り、お笑いやクイズなど自分が楽しむという視点に偏っていた。

そこで、教師は「一般のテレビ局との違いからケーブルテレビの魅力をアップする番組とは何か」と問い直し、番組企画について話し合った。

すると、ケーブルテレビの特徴をいかすために「楽しいだけでなく、住民の役に立つもの」

「住民のふれあいが広がるもの」

「地域のことがよくわかるもの」

という番組企画の視点が出てきた。

また、先進事例に学ぼうと全国各地のケーブルテレビのコミュニティ番組について、インターネットや電話、FAXで問い合わせた。(課外利用)

そして、調べたことをもとに、番組の企画会議を設定した。議題「魅力ある番組企画としてふさわしい事例とは何か」(価値判断場面)を吟味した。

直接自分が調べただけに活発な意見交流が行われた。事例の一つ「雲仙普賢岳(島原市)の24時間放送の意味」の授業場面を右図に示す。

B児はケーブルテレビ島原の番組を例にして、「住民の安全を考えた安全チャンネル」の必要性を主張した。これに対して、「24時間しなくても、噴火の兆候があったときだけ放送すればいい」、



「いつ噴火するのかわからないからこそ24時間放送の意味がある」、「島原の人たちは噴火を体験して不安があるからこそ

意味がある」、「阪神大震災でも淡路ケーブルテレビは被害の状況やボランティアの様子を知らせて助かったと聞いた」、「でも、それはその地域のこと社町では必要ないのではないか」など子どもたちなりに公共番組としての意味、有益な情報を流すことや、受け止めることに触れたなかなか鋭い考えがたくさん出てきた。

- C6: 雲仙普賢岳で24時間放送とあるけど必要なの?
- C7: 地域の人が不安、観光業者も安心してツアーが組めない。雲仙普賢岳の状況を確認するためにやっている。
- C8: でも、24時間放送することが必要なの?
- C7: 専用チャンネルがあって放送していると聞いた。
- 多数: でもその番組を見てないと意味ないやん。
- 教師: C7さんに賛成? 24時間も意味ないと思う人?
- 全体: 意味あるよ。あぶない。いつ噴火するかわからん。
- 全体: 見てないと意味ないやん。24時間ってずっと?
- C9: 専用だから、災害がおこった時にすぐに対応できる
- C10: 危険を知って、非難できる。情報は早いことが大切
- C11: でも、ふつうのニュースで十分。(そうそうの声)
- C12: 24時間だからこそ噴火した瞬間がわかるから。
- C13: だけど、やっぱり見てないと意味ないやん。
- C9: ドカンと聞こえたら、テレビをつけて、すぐに情報が入るからいい
- C14: それにしても、起こった時に放送すれば十分では。
- C15: C14さんの意見と同じ。昔あったからといって天災はそんなにおきるものじゃないからしなくていい。
- C16: (資料を見せながら) 阪神大震災では、五色町で多くの家屋が被災した。その時、断水や避難場所、学校の休校のお知らせなど住民の人々に知らせなければならぬ被害状況などの告知放送をして、災害が起こった時にすぐ役立つからやっぱり必要。
- C17: 地元のテレビだからこそいち早く放送したり、噴火した後も情報提供を続けたりすることができた。
- C18: 阪神大震災ではすぐ役立つのはわかるけど、雲仙普賢岳は噴火だからそんなに必要でない。
- C19: テレネットやしるでも、緊急の場合はすぐに知らせる仕組みがある。社町ではそれで十分だと思う。
- 複数: (そうそうの声) すぐに知らせるシステムがあるよ。
- C12: 阪神大震災も近畿に地震がないと言われていて起こったのだから、いつおこるかかわからない。C14やC15、C18さんの意見に反対。
- C13: 情報は必要な時こそ流せばいい。
- C14: やっぱり、災害の時は、ふつうのニュースでもやる。
- C10: それじゃ遅い。地元のテレビじゃないと詳しくない
- C7: やっぱり、被害に一度会った人はすごく怖い気持ちがある。その不安を少なくするために24時間必要。
- C18: テレビじゃなくてできる。例えば、避難地図。
- C20: だから、それでは遅いし、全部伝わるかわからない。
- 教師: 24時間の意味があるかないかの議論から、地域にとっての情報の意味が出てきたね。

このように地域社会にとっての情報の有用性(話題性・必要性・独自性)や意味について価値判断を行った。ケーブルテレビが地域の人たちにとって、身近で有益な情報を発信していることや、災害時の住民の命綱として活用されたことを認識した。

「地域に必要な情報について」の議論を2度行

う中で、情報と生活とのつながりの多様な価値に気づき、情報の受け手としての立場だけでなく、情報の送り手としての立場からも考えることができた。

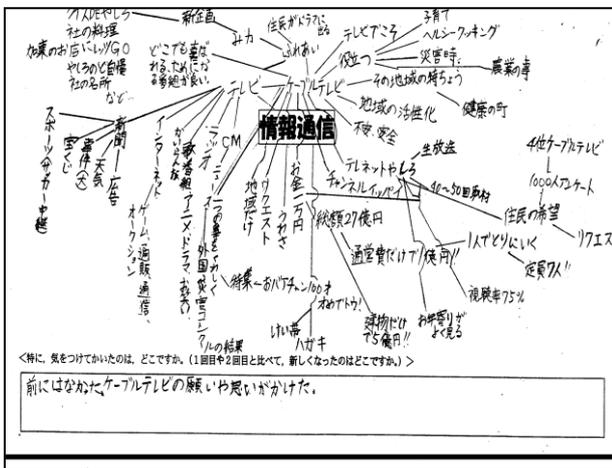
議論の末、現在、社町に必要な情報として

- その①：社町は高齢化率が高くなってお年寄りが増えてきていること
- その②：合併を間近に控えているので、3町の特徴をアピールすること
- その③：子どもやお年寄りがふれあえるもの（番組に出演できるもの）

など、クラスの新企画提案は7本となった。

最終的に、どの番組にするかという判断ではなく、新企画の番組に対する意味づけがクラスで納得できたものはすべて新企画提案に入れることにしたのである。

複数回書いたA児のイメージマップに着目すると、「情報の種類・特徴」→「番組作り（仕組みや取材方法、費用面）・ケーブルテレビの特徴・視聴者側の思い」→「番組の目的や魅力・情報の有用性・地域の特徴」へと認識が深化している。



また、A児自身のコメントから、「テレビはニュースなどたくさんの情報が入る」（1回目）→「お金のことや取材のことが増えた」（2回目）→「ケーブルテレビの願いや思いが書けた」（3回目）と自分の学びをメタ認知した。地域の情報化について議論する中で情報の有用性や影響を考えることができたと言えるであろう。

【第三次「地域の情報化って何だろう」（3時間）】

小グループで7本それぞれに原稿をつくり、ケ

ーブルテレビ局へ提案を行った。

単元のまとめの話し合いでは、これからの地域に必要な情報（番組）とは、

「地域を元気にする、交流が深まる情報」

「地域を再発見できるような情報」

「地域の人が出演して意見が言える番組」

とまとめた。

「地域の情報化」を考えることが地域社会の一員として、社会へ参画できたという実感をつかんだようである。

5 実践のまとめ

本実践では、ケーブルテレビの番組企画について議論することを通して、地域の情報化に対する社会的な意味づけを重視して実践した。

追究活動の中で、全国各地のケーブルテレビに事例を問い合わせたり、実際に地域のケーブルテレビに出かけたりするなど目的的な活動を展開することで、自分なりの社会的意味づけを深めていった。提案①②の有効性を実感できた。

成果として、地域にとって有効な情報とは何かを問い直したり、この情報こそ、この方法でといった合理性を考えたりすることが、子どもの意識や認識を高めた。それは、議論の中で、同じ事象を根拠にしても立場によってその持つ意味が違ったり、他の立場から関係づけたりするなどの見方や考え方の成長が見られたからである。

一方、課題としては、拡散しがちな議論を焦点化し、明確な基準をどのように子どもと創り上げていくのか、その手立てやプロセスをさらに明らかにしていく必要がある。より納得の得られる判断の基準が難しい。

第3次産業の情報単元においては、ITからICTと言われるように、地域コミュニティの視点をさらに重視した教材化の可能性を探っていくことが求められる。一般的な解釈や論理を自分の言葉で再構築する楽しさを感じて欲しいと思う。

6 引用文献・参考文献

- 総務省、「情報通信白書」（平成17年度版）2005。
- 高岡昌司「平成17年度兵庫教育大学附属小学校提案要項」社会科部2007。
- 兵庫教育大学附属小学校教育研究会著「真の確かな学力を育てる」（黎明書房）拙稿：社会科部提案2006
- 羽鳥光俊監修、「CATVの可能性」（ぎょうせい）、2000。
- 新編「新しい社会」教師用指導書地域事例編、（東京書籍）2005。拙稿5年情報単元ケーブルテレビの実践。